



「定番の現場」を描け

ASPの弱点を克服するSaaSなら、極端な低コスト化を実現できる、スタンダードな共有システムの開発も可能となるはず。しかし、そこには大きな問題がありました。そもそも、博物館の「スタンダード」って、なに？

最初のI.B.MUSEUMが発売されたのは、1992年のこと。当時はMS-DOS用の博物館向け業務ソフトとして発表されましたが、まだ提案性はなく、学芸員の皆様からのご要望への対応が中心の「電子目録作成システム」でした。

しかし、開発経験を重ねるにつれて、似たご要望が増えたことに気づきます。そこで、カスタマイズのパターンを総点検したところ、いくつかの傾向を発見。頻度の高いご要望を標準機能として搭載し、そうでないものをオプションとして細かく切り分ければ、低予算でも質の高いシステムは可能となるはず。

250館、1,000名にものぼる学芸員の皆様との対話は、想像以上に「学芸現場情報」として社内に蓄積されていました。こうして、I.B.MUSEUMは低コスト案件への対応力をも身につけた……のですが、さすがに「パソコン1台分の予算ですべてを賄うシステム」までは無理でした。

SaaSなら、博物館を救えるはず……ですが

博物館のシステム開発では、その館の「業務文化」に合わせた形でのカスタマイズの必要性が発生する一方、コスト低減を優先するために追加作業を避けるケースもあります。しかし、これらの館でも、ほぼ必ず発生するのが、管理項目の名称の変更です。

項目変更こそ「最小カスタマイズ」であり、すべての案件で発生しています。当社の経験上、これをなくして納品したことは、ただの一度もありません。とすると、博物館システムは、すべてが「自館仕様」ということになります。

さて、低予算システムを構築するなら、インターネットを介したASPの採用が有効です。しかし、「ひとつのシステムをみんなで使う」という考え方に基づくため、組織によってまったく異なる業務を行う博物館には不向き。

最低限、ユーザ側で設定が調整できるものでなければ、いま行政が推進している「システムの共有化・標準化」の波には乗れません。ならば、この課題を解決すれば、コストを捻出できない博物館も情報システムを導入できるはず。

そんな発想から検討を始めたのが、設定変更が可能な共有システム構築技術、つまりSaaSの導入でした。

「現場」こそが、SaaS版の設計思想に

制限はあるものの、ある程度の範囲なら自由に「カスタマイズ」できるSaaSなら、ASPの課題を克服可能。でも、ひとつ大きな問題が残ります。カスタマイズ可能ということは、ベースとなるシステムが必要ということ。また、館ごとの差異以前に、各分野に対応しなければならないため、その「スタンダード版」も1種類では済みません。

さらに、博物館の管理項目体系には、海外機関発のものも含めて10種類以上の規格が提唱されており、どれが「定番」と言えるのかは、現在では未知数。有力館の見解もバラバラで、学際的な結論が出ていない状況です。

そんな中で、分野ごとに定番システムを作るのは、ほとんど不可能と思われました。しかし、ここで気づきます。当社には、多数の学芸現場で蓄積した肉声情報がある。学術機関が作成した標準項目のルールを参考に、当社内の「現場標準」を構築すれば良いのではないかと。



当社の結論は、こうです。ほぼ業界スタンダードとして完成の枠にあるI.B.MUSEUMのSaaS版を新規に開発する。その際には、博物館内で学芸員や職員が日常的に迎える業務動線を解析し直し、ここで得られた各業務の相関性を重視して、項目設計を含めた仕様へと落とし込む。

現場を知る開発者なら、現場で使える「定番」を作れる。

※ポイントは、学芸業務の「動線」理解。添付資料②をご参照ください。

第2回 平成21年8月21日発行

